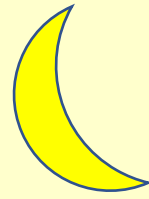


詩人・萩原朔太郎



光る地面に竹が生え、…… 竹、竹、竹が生え。（「竹」『月に吠える』より）

日本の近代詩を代表する詩人・萩原朔太郎は、晩年を世田谷で過ごしました。教科書などを通してその詩の鮮烈なイメージとリズムに出会い、衝撃を受けた方も多いことでしょう。朔太郎は、従来の伝統的な詩の形式やリズムを離れ、新しい表現方法を模索しました。そして、詩集『月に吠える』で新たな領域を開拓し、詩壇に確固たる地位を確立したのです。

朔太郎が活躍した時代は、新時代への理想に満ちた風潮と和洋折衷の文化に溢れていました。彼自身、写真や音楽、デザインなどにも興味を抱き、様々な表現にも挑戦しています。都会や新しい西洋文化に憧れた青春時代から、離婚や家庭崩壊を経た晩年にいたるまで、朔太郎の言葉と表現には、ありふれた現実の中に、あえて別の世界を見ようとする、詩人の力強い意思が感じられます。日常の言葉を使いながら、言葉以上の感覚を伝えようとする彼の試みは、現代詩の流れにも通じており、今なお多くの詩人や作家に影響を与え続けているのです。

萩原朔太郎 はぎわらさくたろう 1886～1942 年（明治 19～昭和 17 年）

詩人。群馬県生まれ。前橋中学在学中より「文庫」「明星」などの著名な文芸誌に短歌を投稿。室生犀星の詩に感動して詩作に入り、北原白秋主宰の「朱楽」に詩が掲載され詩壇デビュー。1917 年、口語自由詩を確立した詩集『月に吠える』を刊行、近代詩に一時代を画した。他の著作に詩集『青猫』『純情小曲集』『氷島』、アフォリズム集『新らしき欲情』、詩論『詩の原理』、評論『日本への回帰』、短編小説『猫町』などがある。1931 年に世田谷区内の下北沢へ移住し、翌々年に自ら設計して建てた代田の家が終の棲家となった。